

## こ つ ま 街 道



去年の終戦の日、奈良の郡山城ホールで戦争の語り部・中田さんの話を聞きました。中田さんは大阪西成の玉出で育ち、学生時代は戦争の中で、戦後、結婚して男の子を一人産み、60を過ぎて「橋のない川」に憧れて奈良の橿原に移り、ご主人を亡くされた後、共産党の婦人部で反戦活動の一環で戦争の語り部をしている、そういう人です。

「古事記と孝経と女子鑑、それに皇国史観の教科書。毎日、毎日、「流汗鍛錬同胞相愛」「流汗鍛錬同胞相愛」、鉢巻を締め、目をつぶり、繰り返し、繰り返し拍子をつけて、叫んでいたのが私の女学校5年間の全てでした」

それから、あの日のこと、B29が悪魔の翼を広げ、大阪の空を覆い尽くしたあの夜、「炎に追われながら、母と私は、こつま街道と国道26号線を行ったり来たりして、北へ北へと逃げました」昭和20年3月13日、大阪大空襲、難波も焼け、天王寺も焼け。玉出のあたりもほとんど焼け野原になって、中田さんは、呆然と、立ち尽くしていたそうです。

そして60年の時が経ち、玉出の町には、マクドやミスドが建ち並び、突然ですが、語り部の話に出てくる「こつま街道」を、ご存知ですか？

僕は遺憾ながら、知らなかった。で、これではイカンと思って調べました。

「勝間(こつま)街道は、江戸時代に栄えた、難波から木津を経て、西天ヶ茶屋、こつま村を通り、粉浜中在家で紀州街道に合流する街道で、一般に願泉寺南から住吉へ抜ける道をいう」願泉寺はJRの今宮駅の近くにあります。粉浜中在家は、住吉界限はずれの閻魔堂のあたりで、ここから紀州街道と分かれて、北北西に進路をとり、細い通りが軒を接するように建っている、天ヶ茶屋の町家の間を縫うように続いている。玉出は昔、こつま村と呼ばれていたんです。

語り部の中田さんが子供のころは、この細い街道を、荷車や荷馬車が砂ぼこりをあげながら、ガタゴトガタゴト、堺や泉州で作られた野菜や果物を、大阪の市場に運んでいたんでしょうか。

でも、今この町を往来する人で、こつま街道を知る人はほとんどいない。住吉をはさんですぐ東の熊野街道が、遠い霊山への憧れと信仰を杖に、人びとが歩みを進めた祈りの道なら、こちらは、今も昔も庶民派代表、なにわの道。だから、織田作よるしく、「ほな、おばはん、行こか」と声かけて、住吉さんから大黒町、天王寺から夕日丘、下寺町から上本町、道修町から天満の天神さんへ、フラフラブラブラ、昔の大阪を探しに、出掛けてみるのも、楽しいかもしれません。

ところで、玉出の町に生根神社があります。住吉大社のすぐ近くにも生根神社があって、祭神はどちらも少彦名命(すくなひこなのみこと)。住吉さんのほうが本家で、玉出のほうは分家という感じだが、この玉出生根神社には本家にはない貴重なものが残っている。「だいがく」と「こつま南瓜」です。

「だいがく」は台額、あるいは台楽と書きます。夏祭りに出される山車の一種で、



太鼓を乗せた台の上に30メートルもの巨大な柱を立てて、それに提灯をいくつも並べて吊るし、先端には奇妙な帽子のような鉾がついている。その柱を太鼓を置いた台の上に立てて、祭りの時は子供たちが太鼓を叩いて、歌ったり踊ったり、これが、玉出の「だいがく祭り」で、この「だいがく」は、今では生根神社にしか残っていない貴重なもの。だから大阪府の有形文化財に指定されています。

でも、どうして神社も町も焼けてしまったのに、「だいがく」だけが焼け残ったのか、その辺の事情を、生根神社の宮司さんが教えてくれました。

戦争末期のことです。玉出の土建屋の親方に、軍から岡山に飛行場を作るように命令があって、後で考えるとそれは特攻隊の基地だったそうだが、(たぶん、どのころは軍隊もメチャクチャで) その時はわけがわからず、とりあえず親方は子分をつれて岡山の田舎に行き、突貫工事で飛行場を作ったんです。(ウーン、なんか、雲をつかむような話ですが、戦争なんですから……)

飛行場を作っても、軍からは何にも言っていない。でも、とにかく飛行場は出来たから、生根神社から「だいがく」を借りてきて、滑走路に建てて完工式をやったんです。(まあ、とにかく慣例ですから、いいんでしょう)

久しぶりに外に出してもらった「だいがく」は嬉しそうに誰もいない飛行場をフワフワと飛んだりして、それが、大阪大空襲の少し前の出来事です。で、そのまま帰れなくなって、岡山の田舎の神社に預けられてお祭りの手伝いなんかをしていたんだが、そいつは時々、寂しそうに西の空を眺めていたそうです。

それで、宮司さんがそいつを探しに行っても無事に見つけたのは、戦後、玉出の町に家が立ち始め、ひばりの「私は街の子」の歌が流行った年の秋のことです。

これは、本当にあった歴史的事実です。その証拠に今年の夏も7月25日と、26日の夏祭りの日に、そいつは赤い提灯をいっぱいつけて子供たちと一緒に、僕達を待っていてくれる。そいつは奇妙な形のデッカイ奴で、寂しがりやで優しい奴で、だから、今年も僕は、会いに行こうと思うんです。

それから、「こつまなんきん」。これはご存知ですね。こつま村特産の、こぶりで味の良いなんきんが、昔からこう呼ばれている。生根神社の境内に「こつまなんきん塚」というのがあります。昔、嵯峨美智子さんという女優さん主演の同名の映画があって、この映画を記念して建てられたと思っている人も多いんですが、違うんですね。江戸時代のある年、攝津から泉州いったいが飢饉に襲われた時に、こつま村の人びとはこつまなんきんを食べて危機を乗り越えた、その時のこつまなんきんの偉い活躍を祈念して、村の人たちが立てた塚、だそうです。

ねんねころいち 天満の市は 大根そろえて 舟に積む  
舟に積んだら どこまで行きやる 木津や難波の 橋の下  
橋の下には かもめがいるよ かもめとりたや 網ほしや  
網がゆらゆら 由良之助

大阪のわらべ歌「天満の市」。もう大阪の川に大根を運ぶ船はいなくなったけど、かもめは今日も、元気です。